

プログラムノート

「カレリア」組曲

ジャン・シベリウスは、民族的旋律と交響的表現を結びつけ、フィンランド音楽の確立に大きく寄与した作曲家である。

彼の音楽は北欧の自然や歴史、民俗文化に深く根ざしており、その代表作の一つが「カレリア組曲」である。民族色豊かな響きと劇的な構成力を併せ持つ管弦楽作品として、今日でも広く親しまれている。

本組曲は、1893年に作曲された劇音楽「カレリア」から抜粋・再編されたものである。原作はフィンランド東部カレリア地方の歴史や伝説を題材とし、英雄や民衆の姿、戦争と平穏の情景を描いた舞台音楽であった。カレリア地方は長くスウェーデンやロシアの支配を受けながらも独自の文化を守り続けてきた土地であり、フィンランド民族の精神的象徴ともいえる存在である。シベリウスは民謡を思わせる旋律や特徴的なリズムを用い、この土地の自然や人々の姿を生きたまま表現した。組曲化に際しては、物語を追うことよりも管弦楽作品としての構成美と音響的效果が重視されている。

組曲は三つの楽曲で構成されており、第1曲「間奏曲」冒頭のホルンの主題は、特殊奏法によるエコーで雄大な自然の広がりを想起させる。続く第2曲「バラード」は、抒情的な旋律が北欧の静かな湖や深い森の情景を映し出す。第3曲「行進曲風」は、勇壮なリズムと金管群の輝かしい響きにより組曲を劇的に締めくくる。

20代後半に書かれた本作は、若き情熱に満ちた初期の代表作であると同時に、後年の交響曲群へと発展していく独自の作風の萌芽を明確に示している。以降のシベリウスの音楽表現を理解する上で不可欠な作品として高く評価され続けている。

野原 さき保/Hr

[初演] 野外劇として1893年11月13日に作曲家自身の指揮によりヘルシンキで初演される。

[編成] Fl2・Picc・Ob2・Ehr・Cl2・Fg2・Hr4・Tp3・Tb3・Tub・Timp・Cym・Trg・BD・Tamb・Str

[演奏時間] 約15分

交響詩「春の歌」

シベリウス《春の歌 (Spring Song)》は1894年、作曲家がまだ二十代の若い頃に書かれた管弦楽曲です。当初は〈即興曲〉という曲名で発表され、後に〈春の歌〉に改稿・改題されました。壮大で重厚な交響曲の作曲家として知られるシベリウスですが、この作品では北欧の自然にひそやかに訪れる春の気配が、抒情的でやさしい響きによって描かれています。旋律は終始、歌うように流れ、静かな余韻を残しながら聴く人の心に寄り添います。

本作はシベリウスの初期作品にあたり、後年の厳格で構築的な作風とは異なる、素直で温かな表現が特徴です。主題には賛美歌を思わせる素朴さと落ち着きがあり、強い対比や劇的な展開は控えめにされています。もともと「歌」として構想されたといわれており、そのため旋律には自然な息づかいが感じられ、管弦楽曲でありながら声楽的ななめらかさを備えています。言葉をもたない音楽だからこそ、聴き手それぞれが自由に情景を思い描くことができる点も、この作品の魅力といえるでしょう。

冒頭では弦楽器の静かな響きが広がり、まだ冷たさの残る早春の空気が描かれます。透明感のある音の重なりの中に、かすかな

光が差し込み、やがて木管楽器が加わることで旋律は楽器から楽器へと受け渡されていきます。その過程で響きは少しずつ明るさを帯び、長い冬の終わりとともに訪れる春の光を思わせます。ある時から曲に「春の哀しみ」という副題が添えられるようになりましたが、一説には作曲者の親友カルペランが「忍耐強くゆっくり訪れる北国の春、切ない哀愁について記したらどうか」と提案したからではないかと考えられる事もあります。

全体を通して大きな高揚はなく、穏やかな流れのまま終結を迎えます。雪解けとともに心がゆっくりとほぐれていくような感覚こそが、この作品の大きな魅力です。若き日のシベリウスが見つめていた、静かでやさしい春の風景に、ぜひ耳を傾けてみてください。

白石 こはる/Cb

[初演] 即興曲として1894年7月21日にフィンランド・ヴァーサの野外音楽祭で初演される。その後、春の歌に改稿・改題。

[編成] Fl2・Picc・Ob2・Cl2・Fg2・Hr4・Tp3・Tb3・Tub・Timp・Chi・Str

[演奏時間] 約10分

プログラムノート

交響曲第1番

交響曲第1番はシベリウスが35歳の頃の作品で、全7曲の交響曲の中では、ドイツの古典的論理を踏襲しながらも、政治的な軋轢とは対照的にロシアの国民楽派からの影響を受けた、後の交響曲に顕われる新たな芸術的表現への挑戦の気概が感じられる原点的な作品となっている。北欧の厳しくも美しい雄大な自然が想起させられるとともに、この曲以前の作曲で深く傾倒していた北欧神話の影響による神秘的な要素も感じられる。交響曲第2番とともに人気のある作品となっている。

作曲当時、帝政ロシアは、当初こそフィンランドに大幅な自治権を認め友好な関係を築いていたものの、19世紀末の国際情勢の急激な変化により、1899年2月フィンランドの自治権を根本的に奪うような政策を打ち出していた。厳しい圧迫政策に苦しめられていた同時代の社会状況が作曲活動に与えた影響は大きく、第二の国歌ともいえる「フィンランディア」の作曲へと繋がっていく。

作曲者の祖国フィンランドは、北緯60度から70度、北は北極圏まで細長く広がり、太陽が沈まない夏の白夜、太陽の昇らない冬の極夜、オーロラに代表される特徴的な光環境を持つ風土である。雪景色の広がる平原、森の光と色彩、静かな湖に映り込む光など魅力的な情景が多い。高緯度のため太陽光は低く、地平線をそっと撫でるだけで弱々しく淡い光が支配的となり、建築物はその自然光をうまく取り入れるよう工夫されている。北欧では、夜明け前と夕焼けの後のわずかな隙に訪れる、あたり一面が青い光に照らされている現象を「ブルーモーメント」と呼び、青い瞬間も美しいが、雪の反射による乳白がかかったピンクやオレンジなどとのグラデーションによる光景も幻想的で素晴らしいという。この国特有の巡る季節の移り変わり、長く暗い秋と冬、一瞬の輝く春と夏、光と闇の変化。それらがこの曲の中の随所に表現されており、聴く人にその情景を思い描かせる。

第1楽章:

序奏部 *Andante, ma non troppo*

主部 *Allegro energico*

楽曲はクラリネットによる神秘的で寂寥としたソロで幕を開ける。長大な旋律の中には、後に続く楽曲全体の各動機の基となる要素が曖昧なかたちで散りばめられている。今回この旋律を演奏するにあたり、先述の夜明け前の光景を意識した。取り巻く空気の冷たさ、広がる空間の深さや暗さなどを想像していただくと嬉しい。ソロの後、徐々に差し込む朝日のように弦楽器の刻みが始まり、主要主題が力強く演奏される。軽やかに登場するフルートの鳥の囀り、短い春の兆しと再びの冬の訪れなどを想像しながら聴いていただきたい。

第2楽章:

Andante (ma non troppo lento)

弦楽器による抒情的な主要主題から始まり、ホルンとコントラバスによって支えられた暖かな響きの中で、長く暗い冬に春の訪れを待ち焦がれている寂寥感を内に秘めたような旋律が進行していく。ファゴットから始まる木管楽器によるフガート風のパッセージの後、急速にうねるように緊張感を高めていき、激しい咆哮に至る。不安を感じさせるチェロの旋律の後、ホルンから始まる春の訪れは第一楽章が想起される。風が吹き荒ぶような激しい盛り上がりした後、楽章冒頭の主要主題へと戻っていく。

第3楽章:

Allegro

力強く鋭角的な輪郭を持つ主題と、木管楽器による軽やかな楽想のふたつが提示され展開していく。この主題は第一楽章の主要主題から派生したものと考えられ、転調を繰り返しながら同形反復しつつ、フーガ風に各楽器に受け継がれながら高揚していく。3拍子のスケルツォのリズムのアクセントが独特で荒々しく、転調の不安定さも相まって実に奏者泣かせである。楽章の中間部を構成するトリオではホルンが牧歌的な広がりや奥行きを見せつつ、フルートの伸びやかで暖かなオブリガードの中に短調の響きが入ることでメランコリックにも感じられる。楽章後半のスケルツォ再現部との対比がよくきいている。

第4楽章:

序奏部 *Andante*

主部 *Allegro molto*

シベリウスの交響曲の中で唯一「幻想曲風に」という印象的な曲想記号が付されており、ベルリオーズの名作《幻想交響曲》の影響も指摘されている。陰鬱な序奏部では第一楽章冒頭の旋律が、それとわかる形で再登場し、チェロ以上の弦楽器により重々しく奏でられる。同時代に活躍したロシアの作曲家チャイコフスキーの交響曲第5番での楽曲冒頭に登場した動機を最終楽章に用いた手法に似ていることからその影響を感じ取れるが、シベリウスは交響曲全体をこの冒頭の旋律そのままでもとめあげることせず、楽曲展開における素材の要として機能することを重視し、発展形としてのちに続く主題と副次主題をこの楽曲の最終回答としたと考えられる。美しく雄大な自然を描いたような極めて重厚な旋律を、個性的な展開を見せるフィナーレとともに是非楽しんでいただきたい。

洲濱 有紀子/Cl

[初演] 1899年4月26日に作曲者自身の指揮によりヘルシンキで初演される。

[編成] Fl2・Picc・Ob2・Cl2・Fg2・Hr4・Tp3・Tb3・Tub・Timp・Cym・Trg・BD・Hp・Str

[演奏時間] 約40分